
FAIRY TAIL ~魔法と創造と竜~

サンダースター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL

～魔法と創造と童～

【ノード】

N7558Y

【作者名】

サンダースター

【あらすじ】

主人公・魔野 無龍まの むりゅうはどこにでもいる普通の高校2年生だった。

彼は「FAIRY TAIL」が大好きで、新しいコミックスが出るとその日に買うほどの人気者である。

ところが、ひょんな事から「FAIRY TAIL」の世界に迷い込んでしまう・・・。

「FAIRY TAIL」のおなじみのキャラはもちろん、オリキヤラやオリジナルストーリーも！

魔野 無龍と「FAIRY TAIL」の仲間が織り成すバトルフ

アンタジー！

プロローグ

『今日からテストか・・・ねみい・・・』

俺は魔野無龍。

どこにでもいるごく普通の高校2年生だ。

「無龍～早くしないと学校、遅れるよ～。」

こいつは未導来夢。

俺の幼馴染で、マガジンやジャンプなどを使読している。

『おはよう。』

「おはよう！』

『昨日、テスト勉強したか？』

「うん、ばっちり！」

『そついや、今日FAIRY TAILの発売日だったつけ

？』

「そうだよ。』

『やつべ、ちよっと先、学校行ってくれ！俺、本屋行って

から行くわ。じゃ！』

「分かった。』

（商店街 本屋）

『ふつ～。FAIRY TAIL最新刊ゲットしたぜ～！』

そういうや、何か忘れてるような・・・

『やつべ～！あと10分で校門が閉まるーー！』

俺は全速力で走った。

「まもなく・・・時は満ちる。』

何だ？今の奴？時は満ちた、とか言つてたような・・・

というより、後5分？！急げ！

（学校 2年A組）

『ぎりぎりセーフ・・・』

「後10秒遅れてたら、大変な事になつてたね。』

「よーし、全員座れ——これから、前期中間テストを始める。」

「3時間後」

『はあ～、テスト終わつた～。』

「前期の中間テストとは思えないような内容だつたね。」

「30分後」

『ふう、やっぱ一番自分の家は落ち着くな～。そういうや、今田買つたFAIRY TAIL最新刊読んで無かつたな

。読むか。』

「夕方 PM 6:30~

『飯も食つたし、風呂も入つたし、今日はもう見たいテレビも無いし・・・寝るか。』

「その夜」

ん、何か変な音がするな・・・

窓なんて、開けてないし・・・一体何だ

『! !』

何だ？あれは？あんなもん家の前に無かつたぞ。

(ピカツ)

うわ！

つ！～一体なんだつたんだ？

また、明日もテストなんだし・・・寝るか

「朝」

『う～ん、良く寝・・・え？』

この風景・・・どつかで・・・

まさか・・・これは、ハルジオンの街！

という事は・・・これはFAIRY TAILの世界？！～
一体何がどうなつてんだ？

キャラ紹介

魔野 無龍 年齢17歳 使用魔法 鉄の造形魔法
らいりゅう むりゅう らいじゅ じゆつかふ てつのかうけいがふ

雷竜の滅竜魔法 ??? (現時点では不明)

備考

高校に通うごく普通の高校生だったが、夜に謎の光を見て、寝て起きたら、「FAIRY」

TAI-L

の世界にいた。基本的には来夢と行動をともにする。
らいじゅ らいむ

雷竜の滅竜魔法を主軸に戦う。

未導 来夢 年齢17歳 使用魔法 念導波
みどう らいむ らいじゅ じゆつかふ サイコキネシス

備考

無龍と同じく、ごく普通の高校生だったが、「FAIRY TAI-L」の世界に迷い込む。

その経緯は不明。また、この世界の文字ある程度読める。
おうどうじゆうにもん

黄道十一門の鍵は持っていないが、銀河系9惑星という謎の

鍵を持

つている。現時点では天王星、土星、海王星の鍵を持つ。ただし、1日1回しか使えないため、

基本は念導波を中心に戦う。
サイコキネシス

第1話 出会い

「ハルジオン 駅」
「あ・・あの・・お客様・・・だ・・大丈夫ですか?」
「あい、いつもの事なので」「
ん・・あれは・・・ハッピー?」
という事は・・・今は第1話の初めの部分と/or事になる
な。
もう少し様子を見ておくか・・あれ?確か、このままだと・
・
「無理! ! ! もう一度と列車には乗らん・・・うふ」
「情報が確かならこの街に火竜サラマンダーがいるハズだよ、行こ」
「ちょ・・・・ちょっと休ませて・・」
「うんうん」
「あ」
「！」
「出発しちゃつた」
「たゞすゞけゝてゝ」
やつぱり・・・ここは助けたほうがいいかもな・・・よし
『なあ、今、発車した電車の方向分かるか?』
「分かるよ、というよりあんた誰?」
『俺は、魔野無龍まのむじゆうだ。』
「おいら、ハッピー、ようしくね。」
『じゃ、急いで追いかけよう。』
「うん」
「ハルジオン 街」
「ここはどこなんだろう?」
あんまり、見たことない風景だし・・・
あの娘に聞いてみよう

「あの～」

「ん? 何?」

「ここって、どこなんですか?」

「ここはハルジオンよ」

ハルジオン? ! !

ということは・・・私、「FAIRYTALE」の世界に

来ちゃつたわけ?

まさか・・・この娘・・・

「ルーシィですか?」

「え? そうだけど・・・あんた誰?」

「あ、私、未導來夢みとうらいむです。」

「よろしくね、来夢。らいむ あたし・・・」

「ルーシィ・ハートフィリアですよね?」

「? ! ! 何で知つてんの! ?」

あれ・・何で私・・・」んな事・・言つたんだろう?・・・
しかも、自然に・・・

「まあ、そんなことは置いといて」

「置くな!」

「しばらく、一諸にいない? 私、この辺の事あまり知らない

し・・・

「ん~、まあいいわ。ただし!」

「ただし?」

「さっきのことは誰にも言わないでよー。」

「分かつた。」

「じゃ、行きましょ。」

第2話 始まり

「ハルジオン 魔法店」
まほうしょっぷ

「えー！！？この街つて魔法屋一軒しかないの？」

「ええ・・・元々、魔法より漁業が盛んな街ですからね。

街の者も魔法使えるのは

いませんでこの店もほほ、旅の魔導士専門店ですわ

「あーあ・・・無駄足だつたかしらねえ」

「まあまあ、そんな事無いかもしませんよ」

「まあまあそう言わずに見てつてくださいな、新商品だつて
ちゃんとそろつてますよ」

「例えば？」

「女の子に人気なのは色替^{カラーバス}の魔法かな、その日の気分に合わせて・

服の色をチョ^ンジ[〜]つてね」

「持つてるし」

「あたしは門^{ゲート}の鍵^{ゲート}の強力なやつ探してるの」

「門^{ゲート}があめずらしいねえ」

「あ、白い子犬^{ホワイトドギー}！」

「そんなのぜんぜん強力じやないよ」

「いーのいーの、探してたんだあー」

「でも、門（ゲート）の鍵つて、高いんじや・・・」

「いくら？」

「2万」

「お・い・く・ら・か・し・ら?」

「だから2万」

「本当はおいくらかしら?ステキなおじさま」

「北の駅」

「いたいた、ナツ」

『大丈夫か？』

「おー・・・ハッピー・・・ん？・・・お前誰だ？」

バタツ

「大丈夫、ナツ？」

『安心しろ、気を失つてるだけだ。』

「そう・・・ありがとう無龍。』

『じゃ、早くナツを列車からおうそう。でないと、このまま氣を失つたままだ。』

「だね。』

『それに、ハルジオンに用があるんだろ？』

「うん、火龍^{サラマンダ}を探してるんだ。』

『じゃ、俺も一緒に行くわ。いいだろ？』

「あい！人数は多いほうがいいしね。』

ピクツ

「あ、ナツ」

「やつと、列車から降りられた・・・つか、お前誰だ？」

『俺はM「無龍^{むりゅう}だよ。』

「そうか・・ありがとな、無龍。オレはナツ・ドラグニルだ、よろしくな！』

『よろしくな、ナツ。』

「よーし、行くぞハッピー！』

「あい！』

／ハルジオン 街中^{ジユエル}

「ちえつ、1000♪しかまけてくれなかつたー、あたしの

色氣は

1000♪か――――つ――！』

「ものにやつあたりするのは良くないよ、ルーシイ。』

「でも、たつた1000♪よ！1・0・0・0・0・J――！』

「人によるんですよそんなの。』

「そんなのつてあんたねえ！・・！？ なにかしら

「さあ？」

「この街に有名な魔導士様が来てるんですって」

「火龍様よーーーつ」

「火龍！！？」

「そうみたいだね」

「あ・・あの店じや買えない火の魔法を操るっていう・・こ

の街にいるの！？」

「へえ、すごい人気ねえ、かつこいいのかしら」

「人気でかつこよくても、あんまり期待しないほうがいいんじゃない？」

まあ、こつちは正体がわかるからいいんだけどね・・・
大丈夫かな？

第3話 ナツとルーシィ

（ハルジオン 教会 横道）
「ナツ、大丈夫か？さつきから元気ないけど。」
「だつてよ、列車には2回も乗つちまうし」「ナツ乗り物弱いもんね」
「ハラは減つたし……」
「うちらお金ないもんね」
『確かに、それは元気なくなるわな……』
「なあハッピー火竜^{サラマンダー}つてのはイグニールの事だよなあ」「うん火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」「だよな」
『へえ、イグニールつてナツにとつて大事な人なんだね』
「やつと見つけた！ちょっと元気になつてきたぞ！」
「あい」
『「！」』
「ホラ！！！噂^{うわせ}をすればなんたらつて！！」
「あい！！！」

（ハルジオン 教会前）
「（な・な・な・な・な・なに？）このドキドキは！？」「ちょ・・・・・ちょっと！？」
「ははつまいつたな、これじゃ、歩けないよ」「（あたしつてばどうしちやつたのよつ！？！？）」「ルーシィ、ルーシィつてば！」
「だめだ・・・反応しないよ・・・」
あの男、確か“紅天のボラ”だつたっけ？
確か、魅了^{チャーム}の指輪をどこかにつけてたような……
あ！ボラがルーシィの方を見た！
「（はうう！？！有名な魔導士だから？だから）んなにド

キドキするの！？（）

「イグニール！！イグニール！！！」

「（これってもしかしてあたし・・・」

「イグニール！！！」

第4話 謎の魔法（おとづれ）伝（シラップ）（前書き）

せひとい、ナニヤリ玉したれた・・・

第4話 謎の魔法(まほう)店(ショップ)

「...」

「誰だオマエ(汗)」

「！！！」

火竜^{サラマンダー}と言えば、わかるかね？

はやつ

『ちょっと、ナツ待つてよ～』

あれ？この声、どこかで・・・

『！』

『来夢^{ムリョウ}！』

『無龍^{ムリョウ}！』

『お前、何でこんな所に？』

『無龍^{ムリョウ}、何でこんな所にいるわけ？』

『てか、場所を変えよ。動きづらくなっちゃがな』

『うん。』

『無龍^{ムリョウ}、どこに行くの？』

『あ、ハッピー！知り合いで会ったから、ちょっと向こうへ行つてくれる』

『あいさ、ナツにも伝えとくよ。』

『今、猫つて、もしかしてハッピー？』

『そうだけど・・・細かい話は後！移動しよう。』

『なら、あのお店なんぞどう？』

あれ？ちょっと待てよ・・・この街に魔法店は一軒しかな

いはず、

・・・まあとりあえず行くか・・・・・

（ハルジオン 教会前）

「ちょっとアンタ失礼じゃない？」

「お

「やつよ……火竜様はすつしに魔導士なのよ」

「お

「あやまつなれこよ」

「なんだオマエら」

「まあまあ、その辺にしておきたまえ、彼とて悪氣があつた訳じゃないんだからね」

「やせし~」

「あ~ん」

キュツ キュキュ キュツ

「僕のサインだ。友達に血液循环するといい。」

「キヤー」

「いいな~」

「いらん

「何なのよアンタ！……！」

「どつか行きなさい」

「うごひつ

「人違いだつたね」

「ハルジオン 謎の魔法店まほうシヨウテン

『とりあえず、お前何で、ここにいるんだ?』

『えーと……確か何かが、家の前にあって、それが光つて、気がついたら

「ここに……」

『それって、もしかして、夜中の〇時ごろか?…』

『え・・う、うん。多分……』

『〇時ごろに、家の前に謎の物体がいて、光を見て、この世界に来た……』

「何でだろう?」

「ん? 何か今、触れたよつな……え? これ……え? これ……」

『100万ル? ! !』

「無龍^{むりゅう}、だめだよー、人のお金盗んじゃー」

『いやいや（汗）、盗むかよ、ポケットの中になつたんだよ』

「とりあえず、ここで服とか使えそうな物を買おうよ」

『お前、つい数秒前まで盗んだお金って言つて無かつたけ?』

「ねえ、これなんてどう?』

『つーー何だ?すごく邪悪な何かを感じるんだが・・・』

「とりあえず、振つとけば?無龍^{むりゅう}。』

『(なぜ、素振り感覚・・・)』

「早く、早く!..』

『つたく・・・』

持つたかんじ特に異常は・・・無いな

とりあえず、戻すか・・・

あれ?戻せない?・・・といつより、手首になんか、ドク

ロのマークが・・・

「それは、魔劍^{まけん}?レオパルド。それを持った者は死ぬまで

その剣を持たなければならぬ』

『あんた、一体誰だ?』

第5話 船上パーティー

「わしはアレク・デヴァー。ただの商人じゃ。」

『魔劍まけんを売つている奴が商人だ?』

笑わせんな、あからさまにおかしいだろ。

勝手にこんなマークいれやがつて、ふざけんな!』

「悪かつたな、こんなマークで。」

『つ! ? 剣がしゃべつた?!』

「面白一い。これ、買おつ無龍むりゅう。」

『面白くないし、こんなもんく「おじいちゃん、いくり?』

『人の話を聞け!』

『50万じゅうエル』じや。』

「はい、どうぞ。」

『勝手に、払うな!』

『お譲ちゃん、この鍵かぎはいるかね?』

「なんですか? これ?』

「これは? 銀河系9惑星 の鍵かぎじや。』

うちには、天皇星、土星、海王星の3つしかないがの。』

『買います! いくらですか?』

『ただ無料でやろう。』

「本当ですか! やりいへ!』

（10分後）

『ずいぶんと、買つたな!』

『残り、10万じゅうエル』しかないよ。』

『じゃ、行くか。』

『またの来店を期待してあるがね~』

『一度と来るか!』

「・・・」

ブルブルブルブル

「ええ・・・分かりました。」

（ハルジオン 教会前）

「人違ひだつたね

「君たちの熱い歓迎には感謝するけど・・・僕はこの

先の港に

用があるんだ」

あー・・・なんかうざいのがいるなあ

「失礼するよ

パチン

「――――――」

「夜は船上でパーティをやるよ、みんな参加してくれるよね

「ねえ、無龍・・・」

『あ、気づいた？ 3週回って基本うざい奴だ。』

「なんだアイツは

「本当いけすかないわよね

ザツ

「さつきはありがとね

「は？」

「？」

（ハルジオン レストラン）

ぐばぼばぼば！！

「あんふあいいひほがぶあ

『「あんたいいひとだな」だと』

「うんうん

「もう少し、静かにしなよ。」

「あはは・・・ナツとハッピーと無龍だっけ？
わかつたから、ゆっくり食べなつて

なんか飛んできてるから・・・

てかお色氣代パーね・・・

「ルーシィ、心の声でてる」

『「というより、俺は静かだが？」

「にしても、あんたら知り合いだつたのね』

「10年近く一諸だからね。」

「あの火竜^{サラマンダー}つて男、？魅了^{チャーム}つていう魔法を使ってたの。

この魔法は人々の心を術者引きつける魔法なのね
何年か前に発売が禁止されてるんだけど・・・

あんな魔法で女の子たちの氣を引こうだなんて、やらしい奴よね。

あたしはアンタたちが飛び込んできたおかげで魅了^{チャーム}が解けたつて訳^{わけ}』

「なぶぼー」

『「なるほど」だと』

「こー見えて一応、魔導士なんだー、あたし

「ほほお」

『「ほほお」だと』

「まだギルドには入つてないんだけどね。

あ、ギルドってのはね、魔導士たちの集まる組合で、魔導

士たちに仕事や情報を

仲介^{ちゅうかい}してくれる所なの。

魔導士^{まどし}つてギルドで働くないと一人前つて言えないものな

のよ』

「ふが・・」

「でもね！―でもね！―」

『「強調^{きょうとう}しなくていいから」』

「ギルドってのは世界中につぱいあって、

やっぱ人気あるギルドは、それなりに入るのはキビしいら
しいのね。』

第5話 船上パーティー（後書き）

ルーシイの説明が長いので次話に続きは持ち越しします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7558y/>

FAIRY TAIL ~魔法と創造と竜~

2011年12月31日16時45分発行